

2) アユの冷水病、シュードモナス病の発生状況

山本充孝・二宮浩司

【背景】近年、アユ養殖場では冷水病やシュードモナス病が多発し、大きな被害を与えている。

【目的】両疾病に対する疫学調査を実施し、発生条件の検討を行い、養殖場での被害軽減のための基礎資料を得る。

【成果概要】

平成10アユ年度（平成9年11月～平成10年10月）の魚病診断カルテを取りまとめた。

1. 発生状況：冷水病、シュードモナス病ともにほぼ周年発生した。

2. 症状

①冷水病：鰓・内臓の貧血が主な症状であり、体側や尾柄部に潰瘍を示すものも多かった。その他、特に稚魚期の魚は、下顎に出血や潰瘍症状を示すものが多かった。

②シュードモナス病：主な症状は出血性の腹水貯溜と鰓の軽い貧血であり、その他、内臓に点状出血や肛門の拡張・発赤を示すものが多かった。

3. 池入れ後から発病までの日数（図1）

①冷水病：池入れ後1ヶ月以内といった早期に発病することが多かったが、100日以上経ってから発病することもあった。但しこれは、その池における2回目以降の発生と思われる。

②シュードモナス病：15日目以内に発病した事例はなかった。多くは20日目以降に発生した。また、池入れ後100日以上経ってからの発病も見られた。

4. 飼育池の水温（図2,3）

①冷水病：大半は20.0℃以下の水温で発生していた。

②シュードモナス病：水温15℃未満での発症例は少なかった。昨年の傾向と異なり、水温20℃以上では日間死亡率2%以上の被害の大きい症例が多く見られた。

5. 日間死亡率：冷水病は0.1%～8.6%、シュードモナス病は0.1%～7.3%の範囲で、ともにばらつきが大きかった（図4）。

6. 薬剤感受性

①冷水病原因菌：スルフィソゾール、フロルフエニコール等に高い感受性を示した。

②シュードモナス病原因菌：感受性を示す薬剤はほとんどなかった。

【成果の活用】

冷水病の場合、加温処理や投薬により被害を抑えてきた。一方、シュードモナス病の場合は治療効果のある薬剤がなく、予防に重点を置かざるを得なかった。

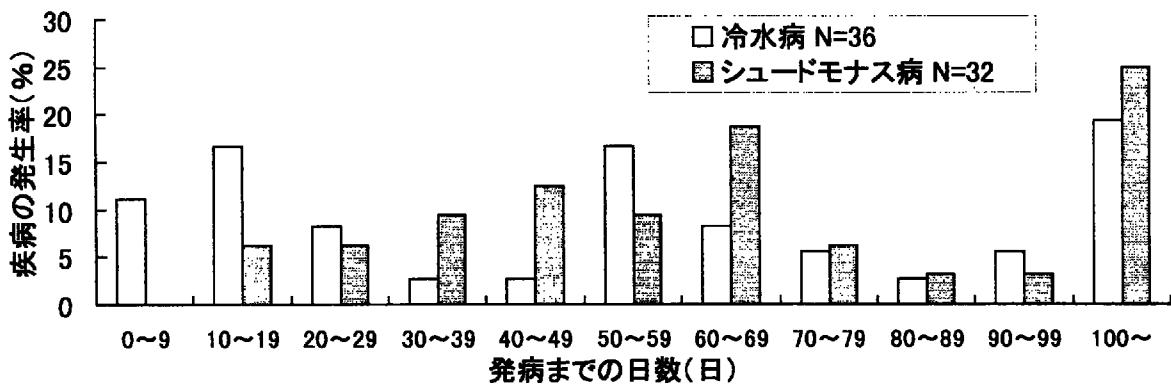


図1 冷水病・シュードモナス病の発病までの日数別発生状況

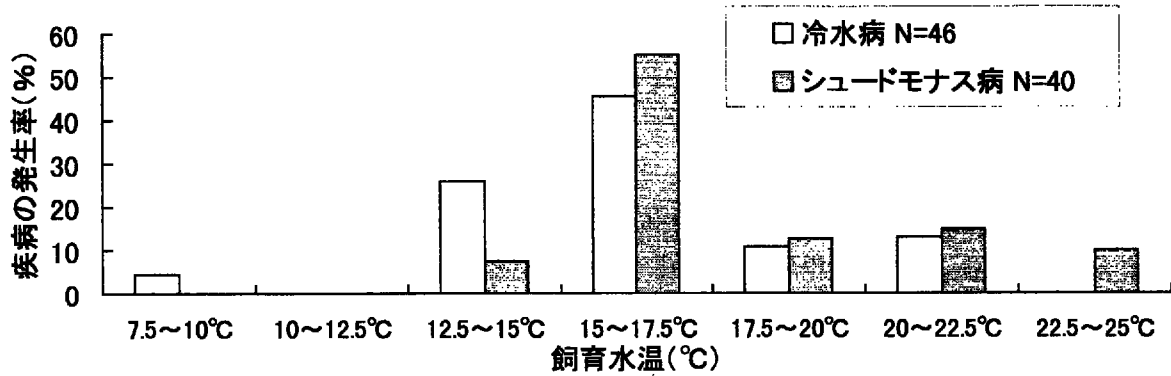


図2 冷水病・シュードモナス病の飼育水温別発生状況

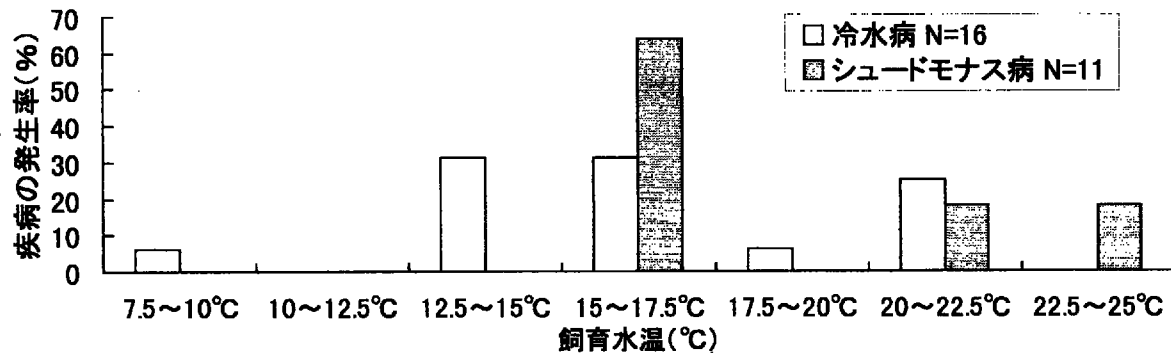


図3 冷水病・シュードモナス病の飼育水温別発生状況 (日間死亡率2%以上)

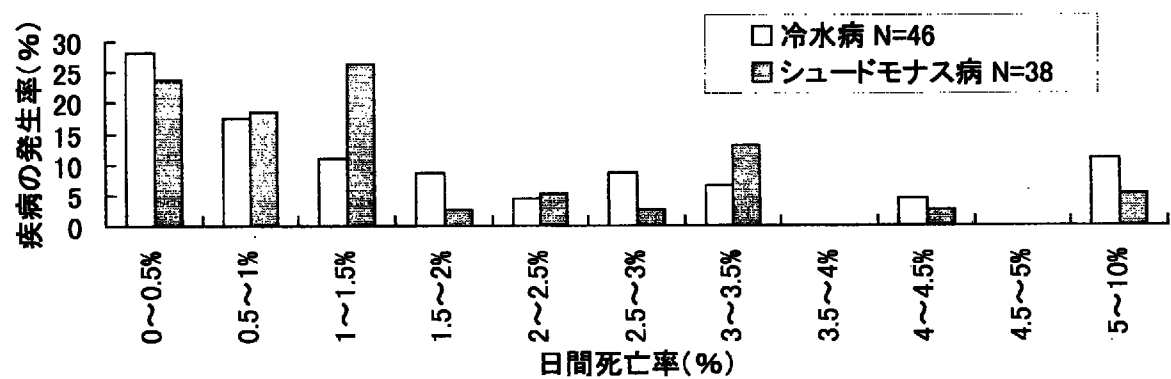


図4 冷水病・シュードモナス病の日間死亡率別発生状況